ワイン需要の落ち込みで、フランスは2年間に5万5,000ヘクタールのぶどう畑を撤去

2025年の不作を受け、2026年のフランスのワイン生産量は3%増加したが、記録上2番目に少ない水準となった

2026年11月17日（火）



フランスのワイン産業は2026年に小幅な回復を見せたが、生産量とぶどう畑面積の長期的な縮小傾向を変えるには至らなかった。飲酒習慣の変化が続き、同国を代表する農業分野の一つを揺さぶっている。

RTLが11月16日月曜日に報じたところによると、収穫を終えたフランスのぶどう畑では、2026年のワイン生産量が2025年を3%上回った。それでも2026年の収穫量は歴史的な低水準にとどまり、同局の分析によれば、記録上、2025年に次いで2番目に少ない年となった。

この数字は、フランスのワイン産地で拡大する不均衡を示している。ぶどうの樹は、他の多くの作物よりも度重なる熱波に耐える力を見せている一方、ワイン需要の減少を受け、生産者は広大なぶどう畑を引き抜いている。

RTLによると、フランスでは2025年と2026年の2年間で5万5,000ヘクタールのぶどう畑が撤去された。

わずか2年で全国のぶどう畑面積の7%超に当たり、大規模なワイン生産で長く知られてきた国にとって、構造的な調整としては大きな規模だ。

低迷の原因は天候だけではない。報道によると、生産者にとってより大きな問題はワイン消費の減少であり、気温上昇のもとでもぶどう畑が比較的持ちこたえている一方、生産の必要性は低下している。この組み合わせが、RTLの表現する業界の逆説を生んでいる。気候変動への適応力が高いとみられる作物が、消費者の購入・飲用量の減少を理由に縮小されているのだ。

2026年の収穫は、生育期にフランスが度重なる熱波に見舞われたため、当初は懸念されていた。最終的な結果は、多くの生産者の予想を上回った。この比較的高い耐性は、他の作物の状況と対照的だった。RTLによると、飼料用トウモロコシと缶詰・冷凍食品向け野菜の収量は20〜40%減少した。

その明確な例の一つが、国内最大のワイン産地であるラングドック・ルーションだ。RTLによると、夏の猛暑にもかかわらず、同地域の2026年のワイン生産量は2025年比で25%増加した。コルビエール地方のレジニャンにある気象観測所のデータでは、ぶどうの実が膨らむ6月から8月にかけて、日最高気温の平均が33℃（約91°F）を上回った。これは季節平年値より4.5℃高かった。

この耐性の源は、植物そのものにある。ぶどうの根は3〜5メートルまで伸びるため、特に冬から春にかけての降雨の後、土壌の深い層から水分を取り込むことができる。トウモロコシ、サヤインゲン、ズッキーニなどの一年生作物は根系がそこまで深くならず、地表の水分が失われると収量が急減しやすい。

その結果、農学的な観点では、気温が上昇する気候のもとで、ぶどうは他の多くの作物より有利な立場にある可能性がある。RTLによると、気温上昇に伴い、ぶどう畑が徐々にさらに北へ広がる可能性さえ検討されている。しかし、ワイン産業の経済状況は逆方向に動いている。国内消費の減少が生産者を圧迫し、業界は栽培面積を拡大に備えて増やすのではなく、縮小せざるを得なくなっている。

この影響はぶどう栽培農家にとどまらない。これほどの規模でぶどう畑が縮小すれば、瓶詰め業者や流通業者から、フランスの生産量の変化を注視する輸入業者まで、飲料業界全体のワイン供給、調達戦略、競争上の立ち位置に徐々に影響する可能性がある。縮小が続けば、天候だけが主因ではないとしても、買い手がフランス産ワインと他の生産国からの供給をどう組み合わせるかが変わる可能性がある。

フランス市場では、飲酒習慣のより広範な変化の一環として、ワイン消費の長期的な減少が何年も続いている。RTLの報道は消費減少の規模を数値で示していないが、最近の抜根の動きの中心的な要因として挙げている。実際には、業界は気候ストレスだけでなく、顧客層の縮小にも対応しているということだ。

生産者にとって、2026年の数字がもたらす安堵は限られている。低調だった2025年の収穫から3%増えたことは、業界が夏の高温に耐えたことを示す。しかし、比較の起点が例外的に低い年であるため、この回復は生産量が以前の水準に戻ったことを意味しない。むしろ、基準となる水準がいかに低くなったかを浮き彫りにしている。

生物学的な耐性と市場の弱さの対比は、今後もフランスのワインをめぐる議論の中心であり続けそうだ。暑く乾燥した夏にも、ぶどうは周辺の多くの作物より持ちこたえる可能性がある。しかし、

その強さだけでは、消費の減少とぶどう畑面積の縮小がもたらす商業上の圧力は解消できない。